

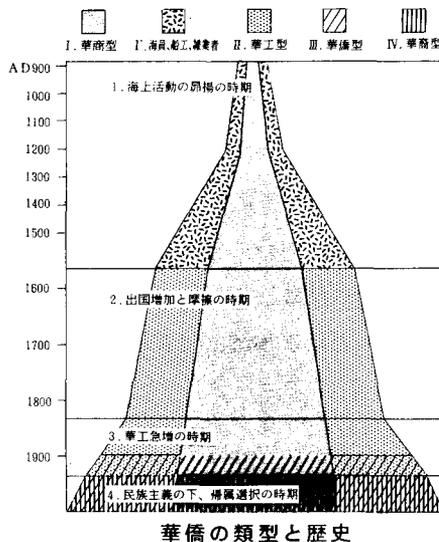
華僑史の視点から

斯波 義信

華僑を中国と東南アジアを接合するボンドと捉え、その時間経過の中での問題の流れを考えると、タイトルに「華僑史」という言葉を使っている。また、地域や国ごとによって華僑の置かれている状況はかなり違う。このような時間軸と空間軸を考えながら、「中国と東南アジア」という「と」のところに力点を置いて話を進めたいと思う。

まず、華僑の概要から説明していこう。一言で華僑と言っても、国ごとに占める人口の割合で、その存在状況は変わってくる。例えば3%以下の小さな比率では、家族的なネットワークの絆が重要になってくるが、比率が大きくなれば、受容国の政治や経済に大きく関わる問題も出てくるだろう。また、どういう教育を受けたのかによって立場も姿勢も違ってくる。東南アジアにおける華僑の比率は、タイ13%、シンガポール76.9%、マレーシア33.1%、ブルネイ25.4%、インドネシア2.8%、フィリピン1.5%と非常に格差があり、それぞれで問題を抱えている。

華僑の類型としては、華商型(トレーダータイプ)、華工型(レイバラータイプ)、華僑型(受国者タイプ)、華裔型(現世代タイプ)の4種類を考えておく必要があるだろう。ちなみに、「華僑」という話は1885年頃から出てきた言葉で、それまでは「唐人」と呼ばれていた。「華人」という用例も時々出てはくるが、普遍的な言葉ではない。華僑という言葉が出たところで、ナショナリズムの問題や市民権の問題も出現してきたと言えるだろう。



それを念頭に置いて時代区分を考えてみよう。ただし、中国史で扱われる時代区分をそのまま適用しても、華僑史は解けない。やはり独自の分期が必要であり、なかんずく東南アジア史と共に考えていくことが重要に思える。

華僑の黎明期と言える時期は、12~16世紀初め頃と考えられる。華商、その中国船が中心となり、海上活動をした時期である。海上商業に中国人達が乗り出したのは、造船技術や航海術などの技術的な問題から見ても、12世紀頃に間違いなだろう。また生産的な背景として、江南で起こった農業革命が考えられる。これが総

余剰を生み出し、ドライビング・フォースになったと考えている。同時に情報・交通の革命がある。宋代に印刷術によって情報がすみやかに流れ、交通では内陸水路と海上水路が同時に発達し、それが商業を生み出す要素となった。

この頃の中国船の航海は、ふつう10年あるいは5年でめぐるもので、小修理は5年の周期で行われていた。それもピストンのように2港を往復するのではない。つまり拠点港へ行って、そこから周辺を一月ぐらい廻り、また先へ行く。このような長期の航海ゆえに、大勢の補給部隊を連れて行くことになる。200人の構成であれば、本体の商人は25～30人にすぎない。水夫や船医、その他様々な人員を連れての航海である。例えば、豚の群を連れて豚飼いが鉱山へ行き、豚を売って錫を集め、それを港の商人に売る。補給や通訳や倉庫、卸の売買、医療や修船、演芸を行っていた者が相当数おり、それが集散港の唐人社会を作っていたと考えられる。その次が16、17世紀の「西太平洋の商業の世紀」である。1545年にポトシ銀鉱の発見があり、メキシコ銀が大量にマニラ経由でアジアに向って来た1570年代から、1630年頃にそれが下降するまでが、この時期に当たる。この頃になると、中国向け、日本向け、西洋向けというような国際分業が東南アジアで広がり、それに伴いかなりの人間が動いていた。だが、17世紀の日本に次いで中国が18世紀に鎖国政策をとり、アジア内の大きな消費市場が閉ざされてくる。1680年、オランダが東南アジアの海域を制圧し、植民地化の前段階になる。この17、18世紀は一つの華僑史の大きな変換の時代であろう。その後の植民地化の拡大は19世紀である。だがこの間の華僑事情は、実はよくわかっていない。

1830年代頃から、苦力(クーリー)が急増した現象がある。1500万人という数字を出す人もいるが、私はせいぜい300～800万人ぐらいと推定している。この時期、1850年代に蒸気船が運行され始め、それ以前のクリッパーの時代に比べて格段に頻度も高くなった。また海底電信の敷設が1860～70年、スエズ運河の開通が1869年と、情報・交通の大きな変化が、苦力急増の背景として考えられる。

苦力と帝国主義という問題は、西洋史の時代移行に沿わせてアジア史を考えていく面が強い。初期の労働移民は決して奴隷代替労働ではない。しかも出港地と入港地の両方で人数をグロスに数えており、ネットより大きい数字が出ている。それにしても1830年から1920年にかけて、苦力が非常に増加していることは間違いない。大量出国の終りは1920年からのゴム不況をはじめとする世界経済の不況期と合致しており、それ以降はずっと漸減時代となる。

東南アジアと中国ということで考えた場合には、やはり16、17世紀に一つの変換期があり、新しい時代が変わったと考えられる。それから後は、19世紀の植民地主義の広がりが、やはり

大きな時代区分となるだろう、ここではアジアの一次産品も、西側向けに栽培・採取されることから、その性質は変化したと言えるだろう。最後はポストコロニアルの時代である。

19世紀末から今世紀半ばには、アジア・ナショナリズムの問題、最近では市民権問題等が出現してくる。「華僑」という言葉が生まれたのも、この時代である。中国の場合は1895年頃だろう。この前に同治中興という対外協調主義があり、公使を交換するという国際互恵的な外交関係ができてくる。それに合わせて、歴代で最も移住に対する罰則が強かった清朝が、海外移住の禁を1893年に解いたのだ。その頃、清仏条約、天津条約の条文、あるいは在日中国領事館の言葉の中に「華僑」という言葉が出ている。ただし、それは国籍法と絡んだナショナリズムの問題として、意識されて出てきた言葉だろう。

1909年に中国で国籍法が出された。血統主義により、海外の華僑やその子孫も中国国籍を持つことになる。これは同年に、ジャワで華僑をオランダ臣民としたことに対抗して出したのだろう。これに対応して、1913、14年にはタイでも国籍法が作られた。要するに、マルチエスニックな人々がいる所で近代的な意識が強くなり、経済力のある華僑を自分達の方に囲い込もうとする現象だろう。それに教育問題も絡んでくる。オランダがジャワ人学校の教育を華僑に受けさせまいとする傾向など、「華僑」という意識がはっきりと表されるようになったのだ。国籍法に絡んで、ナショナリズムが具体的な形で出てきたと言えるだろう。

ナショナリズムと移民問題はオーバーラップしている。中国はそれまでと発想を全く逆転し、華僑は絶対的に保護されるべき中国臣民であるという立場をとる。そして、その働きかけと同時に送金を求めてきた。その上、中華人民共和国と台湾国民政府の血統主義による国籍法は、二重市民権の問題を引き起こしてくる。この時期から、華僑自体が急に政治的な問題になる。

19世紀におけるもう一つの問題は、雑婚による現地への同化・変容である。植民地主義の下で中国人社会は、仲介的な商人として流通ルートを握っていた。植民地政府と現地民の中間社会層として媒介的役割を果たし、いわば植民地政府とタイアップしているグループとして華僑が発達した。それがいわゆるクリオールという、現地に半同化し、混交状態に留まった華人層を作る動機となってくる。植民地主義の産物と言ってもいいだろう。しかしその結果は、国ごとにすべて違っている。

タイは植民地化されなかったことや、血統を問題にしないことから、かなり同化が進んでおり、タイに行った華僑は、二代するともう先祖のことは忘れ、族譜も作らないし、中国式の姓名も捨ててしまう。

海峽植民地のマレー半島では峇峇(ババ)と呼ばれている。やはり植民地政策下で成功して

いた中間層だ。マレーシア独立と共に国の宗教はイスラム教一本になったが、中国人はイスラム教に改宗することにはそうとう抵抗がある。むしろエスニックチャイニーズという形で、中国人同士の団結が強化されていった。

ジャワではプラナカーンという半同化で止まった華人層ができた。中国姓を守り族譜も作る。さらに19世紀末から20世紀に、新しく来た中国生まれの新僑も、中国の慣習をしっかりと身につけている。スカルノ大統領の時から政策で、宗教選択の自由があったことや、種族の多元性も認められていたことから、プラナカーンは生き残ることができた。ただし、今はまた状況が変わり、中国姓を名乗らず、中国人は深く静かに潜行している。プラナカーン問題を表に出せない状況があるようだ。

フィリピンの華人混血者は、かつてはメスティーソと呼ばれていたが、現在はフィリピーノとして、完全に同化していると言ってもいい。すなわち、スペインの宗教を前面に押し出した同化政策が結果的に非常に成功している。カトリックに改宗すれば、移動も商売も自由になる。1877年には、純中国系が2、3万人の時に、メスティーソは29万もいた。今では、フィリピン社会の人員という自覚が非常に強い。

華僑史全般を見渡すと、福建系がプロトタイプで、あらゆる場面をおさえていた。だが18世紀の労働移民が増えた時期から、広東システムという鎖国政策の影響があり、主流は広東に移っていく。以降、現在までの主流は広東系や客家になりつつあるが、華僑全体で考えるときには、やはり福建系がプロトタイプだと思っている。

華僑についてのポピュラーな話題の一つにネットワーク論がある。華僑は非常にアクティブで、それは彼らにネットワークがあるためだとする。これは原則的に同意するし、有効だと思うが、色々な問題がある。ネットワークという中には、中国人独特の結束力とか団結力がある。このチャイニーズネスという本質がなかなか消えないからこそ、彼らは強いのだという議論に進む。しかし現在の中国人社会は華裔の世代であり、むしろトランスナショナルだ。都市の中間層であるとか、ハイモビリティ、ハイキャリアー、そういうものを目指している。現世代では必ずしもチャイニーズネスだけに頼っていない。ネットワーク論やチャイニーズネス論は、もう少しソフィスティケートしなければ問題があるのではないか。

例えば、人類学者は個人の関係のような狭い範囲でそれを捉えているが、社会学者はもっと広い範囲で捉えている。華僑ネットワーク論は、一つは忠誠や愛国のような、母国中国からの政治上の働きかけと、もう一つは送金の問題がある。一方大きく分ければ、結局インフラの整備と独自の情報網の二つに分けられるのではないかという議論がある。ただし、華僑について

言われている緊密な連絡や情報のすべてが、血縁、地縁、同職という関係一般だけを言うとするならば、地域格差の問題も考えた方がよい。

中国本土でこのような意識が一番強いのは華南だ。例えば祖先の位牌を祀るとき、華北は非常にシンプルだが、観念的な崇祖の意識は案外に強くて融通がきかない。華南は儀礼的には非常に入り組んだものを作っているが、それが融通のきかないものかということそうでもない。広東省では連宗通譜といって、小さい族や弱い族は、自分の名前を変えて大族の中に入り込んでしまう。血族の組織も、一つの競争に勝つ戦略として使う。非常に弾性があると言えるだろう。

ネットワーク論を煎じ詰めると、中国人性に共通する地縁、血縁、同業だということになるが、東南アジアで威力を発揮しているものは、華南で生まれソフィスティケートされたものではないか。

また、華僑＝苦力と論じられることが多いが、先述したように苦力が一般に出てくるのは1830年からで、実際にはそれ以前からかなりの人数が動いている。1639年、マニラでの中国農業労働者に向けられた大虐殺や、1740年のバタビア虐殺事件など、現地との摩擦も起きている。量的、頻度的には小さいが、18世紀にも中国人の労働移住はかなり多かったのだ。華僑を一概に苦力論と結びつけてしまうのには無理ある。事実を否定するわけではないが、誇張されすぎているのではないか。

華僑最大の話題はナショナリズムだと言われてきた。事実そうではあったが、最近それは解決に向かってきたように思う。シンガポールでは英語を公用語として使い、中国主義を抑える一方、市民権の取得に関しては非常に自由な考え方で、今では「シンガポリアン」という自覚を持つ中国系住民は多い。先述の通り、インドネシア・ジャワでは、まだ様々な問題を抱えているが、フィリピンでは「フィリピーノ」という形で解決済みと言えるだろう。

かつて中国本土、台湾から華僑への働きかけが強くあった。それは送金問題も含め、孫文の革命の流れをひくような政治問題として捉えられ、華僑すなわち愛国者という思い込みがあった。しかし現実には、ナショナリズムも同化に向けて解決されつつある。

大中華経済圏、儒教資本主義と言われているものも、若干思い込みの面が強い。むしろ「中国人であることは」というアイデンティティには変容がある。文明の搖籃の華北に人種的、また文化的にピュアなるものがあり、それが周りに広がって次々と周辺を囲い込んでいくというのが、非常にポピュラーな考え方であった。しかし、今は未来志向では本命の中国の中心は華南だという主張がむしろ強い。華南こそが最も開放や発展に向けてフィットする価値観を持ち、弾性、モビリティ、勤勉さを備えている。そして親族関係は南において最も強く、それは非常

にアクティブであると。

中国の歴史家も、黄河文明を長江の江と合わせた「江河文明」と言い直すなど、歴史を捉え直し始めている。かつて黄河を中心とした中華、夷狄を追い払うシンボルとしての長城という構図から、多元的な要素を認める構図へと移行し、サウザン・アイデンティティが見直されている時期にある。

そういうことから言えば、華僑と儒教資本主義を単純に結び付けることはできない。むしろここで問題にすべきは、華裔と呼ばれる新しい世代の捉え方である。移動性は高いが、同時にトランスナショナルであり、状況に応じて自分の行き先を決めるタイプが増えている。後継ぎ問題も深刻化しており、世代間のギャップは非常に強くなっている。

今まで看過されてきた問題も多い。私も商業史や都市史や地域史から華僑問題に取り組んできたが、常民史、社会史の視点では、華僑は語られていないところが多い。混交、クリオール問題は、将来を占う意味でも重要な課題だろう。華僑と言え、本国への愛郷心を持っているというも、必ずしもそうとは言えなくなっている。これらは司法制度、政策、宗教の影響、ナショナリズムなどが絡み、全くの状況次第というところがあり、それぞれの国によって状況は違ってくる。しかしハイブリッドな中国人がこれからの形だとすると、華南の行方をみまもることは避けて通れない問題と言えるだろう。

また、東南部中国が辺境か中心かという問題がある。中国の統一性、華北中国の正統性は「史記」によって作られた神話だと考えていい。三国時代や南宋の時代では、その正統性には色々な議論がある。しかし、清・明朝が北に都をおくことで、その神話は確立してきた。だが、今の経済発展を考えれば、華南は中心と言っていいぐらいの地位を占めている。今の華僑問題を考えるにしても、華南と東南アジアという地域の話だろう。中国全体をひとまとめにして問題にするのは、あまり意味がない。

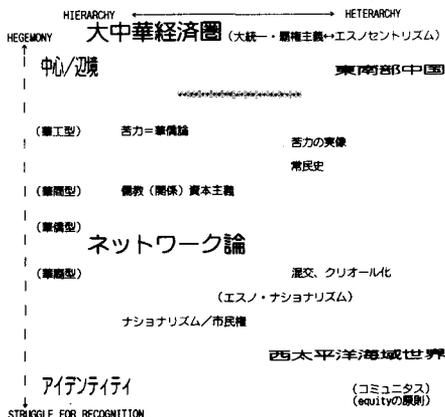
しかし、この海洋交流のフィジカルな性質は、あまりよくわかっていない。モンスーンの動き、海流の動き、交通技術の発達経緯なども十分にはわかっていない。ここでの人の動きは、商品によって動いていたと思う。それも中国をセンターとする国際分業の時期と、西洋に向けて栽培農業が行われる時期とは、やはり区別して考える必要がある。そういう個々の問題が、まだ十分に議論されていないというのが私の感触だ。

コメント

立本成文

今の斯波さんのお話は、華僑の類型を歴史にあてはめた上で、華僑問題を常識的な理解と学術的な見方との両方から見渡されていた。その中で、ポピュラーな話題とされたところと、従来看過されてきた局面として出された項目を見て、私がイメージした構図がある。横軸に HIERARCHY と HETERARCHY という対立項を考え、その一方で縦軸に HEGEMONY と IDENTITY という対立項を立ててみた。あくまでも中心と周辺に固執する見方を示すのが、もっとも左上の HIERARCHY と HEGEMONY 寄りの位置すると考えてもらえばいい。

このような座標のようなものに今日の話題を当てはめていくと、ポピュラーな話題として出され色々批判された項目は、HIERARCHY の側に縦並びになっていく。看過された局面は、それとは対照に HETERARCHY の側に並んでいく。縦の並びは中国の中心から離れていく方向に向いているのではないかということで、このように考えてみた。その縦軸の真真中に国境をおくとすると、その国境をどう捉えるか、中国が国境を越えて出てきたときにどうなるかというのが、今日の話題ではないか。斯波さんのお話を大筋において認めた上で、私なりのコメントを述べてみたい。



コメント

- ① 華僑ネットワーク論はネットワークではなくカテゴリー／集団
- ② 多重的／多元的アイデンティティ (Mirrors & masks --struggle for recognition)
シンボルの重要性
心理的同一性、意識／社会的同一性、期待
自己描写、自己拘束、ホモ・コビー／社会的共鳴、拒絶、要求
時間的持続性
idiosyncratic (personal) identity
categorical (collective) identity
ecological identity
- ③ ネットワークは ecological identity に依存。
- ④ アイデンティティは変わる。華僑は変質する。
アイデンティティの多様性、相対性、可変性 vs 固執性

民族性や華南性から華僑ネットワーク論が語られたが、ネットワークという言葉自体、様々な意味を持っている。よく言われるのが組織下におけるネットワークであろう。まず先に組織(体)があり、その中で、組織(体)のメンバーであるがゆえに関係が出てくる。やくざ組織や秘密結社を思い浮かべてもらえばわかりやすいと思う。華族あるいはエスニックチャイニーズというものであるが故にできる関係性は、開放されたネットワークそのものではなく、華族というカテゴリー、あるいは集団として捉えるべきで、ネットワーク論とは区別しなければならない。

ネットワークという言葉を使うときに、様々な混乱がある。集団のように枠があったり、閉鎖的な関係であったり、メンバーとして認められる人で構成されるカテゴリーというのは、厳密にはネットワークとは言えないだろうと考えている。ネットワークとはあくまでもオープンな関係である。二者関係がつながり、その二者関係が三者になっても、決して閉鎖的にはくくられない。オープンなものである。そう考えたときに、華僑ネットワーク論という言葉には若干の抵抗がある。

ネットワークにおけるアイデンティティをどう考えるかという問題がある。私は「エコロジカル・アイデンティティ」という言葉を考えてみた。これはシチュエーションルと言換えてもいい。エコロジカルというと地縁関係と捉えられる可能性があるが、地縁では必ずしもない。むしろエコロジカルの関係的なものにアイデンティティを求めたい。理念的にはエコロジカル・アイデンティティというものが、ネットワークの中ではありうる。

通常、個人的なパーソナル・アイデンティティと、集団やカテゴリーに基づいたコレクティブ・アイデンティティが考えられるが、その両方に入らないようなアイデンティティがネットワークにはあるのではないか。あるいはそれを考えれば、おもしろいだろうということで、エコロジカル・アイデンティティというものを考えてみた。ネットワークはエコロジカル・アイデンティティに依存しているとも言えるだろう。中国人のアイデンティティの質も、熱帯多雨林と多島海というエコロジーに沿って変容していくのではないだろうか。(なお、拙稿「地域間比較とアイデンティティ」『総合的地域研究』第12号参照。)

華僑あるいは華族というのは、いずれもエスニック・チャイニーズの観点からの話である。ところが我々がエスニックと捉えるのは、ブギス、マレー人のような小さなエスニック単位だ。華僑論はいつも、「華」対「非華」という構図で論じられるが、少なくとも「華」対「ブギス」のあたりまで議論をもってこれないだろうか。あるいは、もっと言語集団のようなもので割ることはできないか。「華」とはいったい何か。もとより広大な中国には、新疆のような漢族ではない所も含まれている。そのようなレベルの「華族」対「非華族」の構図を東南アジア

での華僑論に当てはめられてしまうのでは、非常に困ることになる。エスノセントリズムがそのまま持ち込まれることになる。

その意味で言えば、割ってしまったエスニスティで考えると、いわゆるワールド・オブ・ザ・チャイニーズ・エスニスティというのは、案外変わりうるのではないか。いつも中国の文化的伝統というもので論じられるように、何か変わりえないようなチャイニーズネスがあるとされるのが、中国の大問題でもある。だがその中国人も東南アジアでは変わりつつある。そういう意味で、東南アジアのマルチエスニズム、あるいはマルチカルチュラルリズムを議論するのに、やはりエスニック・チャイニーズとして構図を決めていくのは問題があると思う。

質疑応答

斯波 おっしゃるようにネットワーク論というのは、そのアイデンティティと裏腹な問題だ。アイデンティティをもっと話すべきだった。ネットワーク論は本当に色々多様に使われており、ルーズな関係だけれども、それは単純で一本槍ではなく、多重多元なものだろう。その点では、東南アジアや、西太平洋海域史を考えるとときには役立つ概念だけれども、もっと煮つめた方がいい。これはやはり社会学者や専門家の方に定義問題をうかがってから進めた方がいいだろう。

弘末雅士 東南アジアの国々に華人系の人々が移住し定着していく中で、19世紀の後半頃からナショナリズムの原型のようなものを作っていく部分が、いずれの国でも出てくる。大中華というような中心から東南アジアに来て、混交、クレオール化していくというベクトルの部分というのは、我々東南アジア研究者も注目し、研究されているところだ。そこ

で中国のご専門家の方には、移動し、クレオール化され混交化されていく人々から見た中国像とはどういうものなのかということをお聞きしたい。

斯波 例えば20世紀になって、中国本土と華僑の関係が密接になり、送金や忠誠心の表明が多く見られた。王賡武氏によると、それは国家に対する忠誠とも書けるし、郷里を援助していたにすぎないとも書ける。中央の方は自分のアピールが行き届いたと見ているかもしれないが、実際に金を送っている連中から見ると、国に対してというよりも、むしろ郷土という地方社会に向いていたと思うと言う。

1893年までの華僑は棄民だという見方がある。つまり外国に出ているということは国を捨てたとみなし、もう面倒を見ない。ただし、法律レベルではそうだということで、帰ったら首を切られるようなことはないようだ。そのへんがザル法みたいなもので、結構抜けて

いる。

それからもう一つは、どこをもって自分の本当の国と考えているのかという問題もあるだろう。歴史文化レベルの中国、その四千年とか五千年とかの流れを考えている華僑もいるだろうが、現実に直接関係している郷里というレベルのつながり意識もあるだろうと思う。中国史は常に統一の時代であるというふうに語られてきているが、半分以上は地方に重心が分散している時期だったとさえ言える。反乱がおこったり土地が不足すると地方へ行く。南に行った連中については、国はおおむねネガティブな目で見ている。移民自体が自分達の祖先は中原から来たのだと主張したりもする。それでも中央は常に地方主義を否定し、地方で起こっていることはネガティブにしか見ていない。中央の編年史から見るとそうなるが、常民史や実際に動いていた人達の間から見ると、本当に思い入れのあるのは自分の郷里ではなかったかと思っている。

坪内 斯波さんは、中国から見た華僑、中国に根元を持つ華僑という筋道で、全体の構想を語っておられる。だが、受け入れられた側からどのように華僑が存在しているのかという見方がもう一方にあると思う。ある意味で立本さんが言われたシチュエーション、あるいはエコロジカルというところになるのかもしれないが、華僑をどう受容しているかという見方があるだろう。

一方で、斯波さんはアイデンティティが主

導するタイプの話がされたが、今度は華僑を受け入れた側からは、どのように華僑を捉えているのだろうか。これらの発想の突き合わせをやれば、位置付けがもう少しダイナミックになってくるのではないかと思う。その意味では、アイデンティティをふりかざす華僑論と、そうではない華僑論を区別する枠組みを作って欲しい。

例えばレジメではシンガポールとマレーシアという枠が作られているが、確かに地域としてはいいかもしれないが、本当は異質なものが含まれている状況が入っているように思う。もう一つダイナミックにする方法もあるのではないか。

フィリピンやマレーシアに行くと、例えば取引業者、仲買人というのは、どこから来たチャイニーズかというローカルな視点ではなく、チャイニーズだという意識で何か輪郭的な受け取られ方をされている感じがする。

同じ仲買業や中間業者という機能を、ある所では中国人に代わって全然別の種族がやっている。すると、チャイニーズというのは、彼らに代わってそういう機能を営むだけの役割を持って入ってきた人々という受けとめ方もできる。そういう人々が、土地の人に対してどのような対応をとるかというのは、いろいろと違って来る。自分のアイデンティティや文化を固く守ったままであったり、あるいはババのように変容しながら、あるいはタイの場合のように、ほとんど忘れたままでとい

うように、生き方は色々ある。それらをも一括して「チャイニーズ」と土地の側で言われるのは、やはり構造自身で捉えなければいけないところがあるのではないか。

川勝 経済史では華僑は苦力型で理解されてきた。黒人奴隷制がヨーロッパのイギリスを皮切りに廃止され、黒人奴隷を使えなくなり、特に欧米勢力がアジアに本格的に乗り出す19世紀後半以降はインド人と中国人苦力が黒人奴隷の代わりに使われたというのが教科書的理解だ。だが、斯波さんが『華僑』（岩波新書）で華僑は福建に淵源を持ち、一千年に及ぶ歴史を持つことを明らかにされた。通説的な華僑像を再検討すべきであろう。

立本さんは華僑はネットワークとして捉えるよりもカテゴリーとして捉えるべきだと話されたが、ネットワークとカテゴリーは対立概念だろうか。ネットワークが深まるにつれてアイデンティティが問われ、アイデンティティの中味としてカテゴリーが出てきたという脈絡があるのではないか。歴史的には華僑のネットワークを媒介にして中国の影響を受けた周辺地域が中国から自立する過程で、それぞれの国がアイデンティティを獲得してカテゴリーを確立し、それが反転してネットワークを担う華僑自体のアイデンティティすなわち華僑としてのカテゴリーが問われることになったと思う。

日本というアイデンティティについて言えば、倭から日本に変わるのが8世紀。倭人は

ネットワークを担う海洋民だったと見られるが、それが白村江の海戦で中国に敗れた後、カテゴリーとして日本が誕生した。日本の誕生には中国の外圧があった。朝鮮の場合、宮嶋さんの近著『両班』（中公新書）に、現在の北朝鮮人のアイデンティティが李氏朝鮮との連続性ではなく、李氏朝鮮が中国へ従属したことへの反感から、むしろ高麗や高句麗との連続性に求められていると書かれているがここでもカテゴリーとしての朝鮮人というアイデンティティは中国からの自立と関係している。

日本や朝鮮で典型的に見られるアイデンティティの確立過程と同じ過程が、20世紀の東南アジア地域で見られる。華僑のネットワークに取り込まれる中からシンガポールやフィリピンとして自覚していく過程はカテゴリーとしての自己のアイデンティティを確立していく過程だろう。それは華南中国人が主導するネットワークの外圧に対するレスポンスとして、カテゴリーすなわちアイデンティティを確立していく過程だ。

濱下さんが提起された中国を見る三つの視点、「閉じるとき開くとき」「北と南のぶつかり合い」「中央と地方の関係」というのは北と南に集約できる。中国が開くというのは南の海の話だし、中央と地方の関係での「地方」は華南を指している。この三つの視点は、華南を見なければ中国は分からないという話だろう。

斯波 その通りだと思う。補足すれば、地理的・中国というときは、チベットもある意味で含まれる。そういうレベルでの話がある。もう一つはカルチュラル・チャイナというものがある。それも史記の正統論で固まってきたものだ。不思議なことに、文化中国だ、あるいは漢字文化圏だとか言っても、最後に落ちつくところは種族なのだ。つまり、ノース・チャイナ・オリジンという神話をそこに織り込む。文化中国というのは絶対的なものとして広がっていった概念であり、非常にわかりにくい。

そういうレベルで考えれば、私はむしろテクノロジーに注目したい。宋代以降、生産革命や情報革命があって、中国をインテグレートした。そのときにはもう核心は南になってきた。それが実像だと思う。

川勝 同感だ。華僑の原型は8, 9世紀に誕生したという事だが、華僑が周辺に影響を及ぼすには12, 3世紀の江南における生産革命を待たねばならなかった。生産革命は12, 3世紀の江南に始まって、明代の14, 5世紀の交通革命と相まって周辺地域に影響を及ぼした。すなわち、中国の江南農法が受容されて、朝鮮と日本ではそれぞれ16世紀、17世紀に大開発時代をもたらし、両国ともに中国をまねて鎖国した。それは日本や朝鮮が中国のネットワークに取り込まれる中から自立していく歴史だ。中国からの外圧に対するレスポンスから、朝鮮の「両班」の伝統文化が成立し、

日本でも近世に「日本の伝統」が形成された。

伝統という観念を持つことで、朝鮮や日本人がアイデンティティを確立したように近代になってそれと類似の過程が東南アジアで見られる。苦力が東南アジアに出ていくと、経済的圧力が東南アジア地域に加わる。朝鮮や日本が15~17世紀に華南経済圏から受けたのと類似の外圧を、19世紀以来東南アジア地域が受けている。19~20世紀には東南アジアで華僑が経済的外圧を及ぼすようになって、フィリピーノやタイというカテゴリーの自覚が生まれた。カテゴリーが問われるときは、ネットワークから自立して独立拠点になるときだと理解する。

斯波 アメリカでは、イエロー仲間というのは「チノ」で一括されてしまう。私もロサンゼルスでは、チノと呼ばれていた。それは、文化レベル、あるいは見かけや種族的なもので呼んでいると思う。もう一つ低いローカルな集団というレベルの話は、今一つわからない。東南アジアでは、フィリピーノはチノと言えるだろう。そういう問題はまだ私自身取り組めていない。おそらく華僑文学や現地文学の中に出ているのだろう。

松原 中国側からの華僑という位置づけとアイデンティティの問題と、東南アジアへ出て行った人達の自分自身に対するアイデンティティに、ズレは当然あるだろうと思う。

1981年に広東省を訪ねたが、広東省の省長に現在の広東省の人口を尋ねたとき、1億2

千万という数字を答えた。それは広東省プラス東南アジアにいる広東省出身者全部を含めた数字だと言うのだ。少なくとも広東省を統べている人達の意識の中では、そういう捉え方をしているのは確かだ。だが、東南アジアに広がっている華僑の人達の出身地は様々だ。リー・クァンユーは、甘粛省に本貫があるようで、去年、甘粛省へ来て宗廟を復建する多額の費用を出したらしい。シンガポールに暮らしているシンガポリアンも、おそらく複雑なのではないかと思う。

そういう意識のズレの問題は、今のところ本当にはわかっていない。中国側、広東省の省長がそういうおおざっぱな形で捉えていることも一つの問題だし、実際に華僑達が送金している意識も、既に重層化しているのではないか。そこが明らかになってきていない。

中国側を主とした華僑研究では、華僑を中国から出ていった形で、そのつながりを見ようとするのが強い。一方、東南アジアをフィールドとする研究者は、必ずしも東南アジアの中の華僑社会をきちんと位置づけることには興味が薄く、現地の民族への関心が先に立つ。そのズレが非常に大きいというのが現状ではないか。

濱下 ただ、リー・クァンユーが大陸へ行ったときに、シンガポリアンとしてではなく、中国人としてのプレゼンスを示したのだろう。だがシンガポールの中では、おそらく中国政府あるいはマレーシア政府に対して、自分達

はシンガポリアンであるという意志表示をしたと思う。アイデンティティの問題は、もちろんセルフ・アイデンティティの中身とも関係するが、誰に対して自分を表現するのかということに関連している。場合によってはネガティブ・アイデンティティの形で、相手側ではないのが自分だということまで極端にいく場合もある。

そういう点では、色々なレベルやタイプが並存し、それらは何ら矛盾しない。それが可能なのかということはあるが、この問題は華僑にとどまらず、もっと一般化してもいいかもしれない。人はアイデンティティというポケットをたくさん持っていて、適宜必要なものを必要なポケットから出してくる。外から見ていると矛盾しているようなアイデンティティを同じ人物が平気で出せる。それはおそらく「誰に対していうか」ということの属人性に特徴付けられるような気がする。

それがどこと結びつくかというネットワークの議論にもなってくるだろう。私自身は東南アジアの華僑送金から大陸を見た経緯がある。特に大陸には行けずに東南アジアには行けたという人々から中国を見てみると、東南アジアに出たからこそ、彼らにとって中華、あるいは中国が必要になったのではないか。中国の中にいたときは、中国も中華も必要ではなかったが、外へ出たがために、逆に中国とか中華が必要になってくるという面もあるだろう。

だが、内部事情は非常に分かれている。同じ広東系でも、例えばタイの華僑では、最初は広肇グループが出ていき、それを後から行った潮州グループが追い払う。また、広東は東南アジアを自分の庭のように思っているが、福建では、非常に遠くへ出ていったという距離感がある。雲南の場合は陸続きで移動できる。結びつき方も自ずと違って来るだろう。そういう中で、アイデンティティは適宜取り出すことができるし、ブロックサインのように組み合わせられて出てくるのだろう。

中国から出た華僑は、元々の「華」を維持している側面を非常に強調するが、そういう側面は第一世代に特に強く、第三世代には新しく国から国へ移民するというトランスナショナルもあり、「華」というアイデンティティも変わっていく。だが、時に応じては先祖返りを示そうとし、時に応じては自分達のマルチナショナル性を示そうとするという、その中間領域にエネルギーがこもっているのではないか。そのあたりを追求していきたい

と思う。

応地 華僑史における黎明期では、中国が最大の海上帝国であり、中国船が海上制覇していたとされていた。以前、濱下さんも朝貢関係の中での東南アジアの一体性を強調されていた。看過された局面では、東南部中国が辺境か中心かという問題が出されているが、そこに中心があるとした場合、そういう一体性を持ち、また中国によって制覇された東南アジアと華南を含む一帯があったということだろう。だが、現在までの展開の中で、中国人そのものがカテゴリー化され、カテゴリーごとのアイデンティティが求められていく。それはそういうものの一体性の崩壊の過程として理解していいのだろうか。

斯波 一体性が崩壊したというところからだろうと思う。だが、海上世界に対しては、支配しているというほどの積極的なものではなかったと思う。一方では、植民地時代から東南アジアで人口が急増している。そういうものとの関係もあるのではないか。